

コワかった海外取材での体験

(1) かるうじて誘拐から免れる

こんな暑いときは怪談でも聞くと涼しくなると言われています。実際に涼しくなるかどうかは疑問ですが、私も海外取材で背筋が寒くなるような場面に何回か遭遇しました。以下、思い出すままにそのいくつかをご紹介します。



現役時代の駐在地だったパナマにニューヨーク経由で行った際のこと。日本からパナマへの直行便はないので、たいていロサンゼルスかマイアミかニューヨーク経由、もしくはメキシコ経由で別便に乗り換えが必要。どんなコースでもだいたい経由地で1泊しなければなりません。

ケネディ空港のロビーを出ると私はタクシー乗り場に向かいました。と、乗り場のすぐ近くでウォークトーカーで話していた男性がさっと私に近づき「ホテルから迎えに来ました」と言う。日本でホテルを予約した際には、そんな出迎えサービスは記してなかったので、“変だな？”と思いながらも“そんなサービスがあるなんて助かった。タクシー探しの手間も省けるし・・・”と彼の車に乗り込んだのです。

車は勢いよく走り出しました。ところが空港の駐車場の出口で止まった。と、もう一人の男が乗り込んできたのです。「ニューヨーク市内に行く友人なので乗せてやってくれ」と運転する男の弁。

「ヤバイ！二人に誘拐されるかもしれない！」。一瞬、恐怖感が襲ってきました。考え直してみると、彼が無線で話していたのは、私の到着をホテルへ報告する電話ではなく、相棒との打ち合わせだったのです。

幸いに車はとんでもない方向に行くこともなく、市内に向かっていました。私は後から乗ってきた男がたまたまスペイン語を話すのを聞き、自分もスペイン語でいかにも中南米については事情が詳しい的印象を与えるように試みたのです。（「そんな簡単にだまされる日本人じゃあないゾ！」とのデモンストレーションでもあったのです）

その効果かどうかわかりませんが、とにかく車は目的のホテル近くまで来ました。でもホテルの玄関につけるのではなく、その前の広い道路の反対側で荷物ともども降ろされることになったのです。関係者に“白タク”とわかってはまずいでしょう。



料金は200ドルを請求されました。正規のタクシー料金だと50ドル前後のはずです。その4倍を吹っ掛けられたわけですが、私は黙って要求通り払いました。文句を言っている間に、今度はどこか人のいないところへでも連れていかれたら手も足も出ない。命が助かった、とにかく無事にホテルまで着いただけでもラッキーだったと。

旅慣れているつもり自分だったけれど甘かった。彼らの上手のやりかたに完全に寄せられていたのです。

皆さん、海外での白タクの手口にはくれぐれもご注意を！！

(2) 運転手の勘違いでメキシコ湾の方まで

思い出すたびに今でもゾットする“失敗体験”です。

今度はヒューストン経由でパナマを訪れたときの事です。

ヒューストン空港のタクシー乗り場に出ると、一人の黒人の運転手が先を争うように私のトランクを奪い取り、車に積み込みました。他のドライバーとの競争です。私は日本でインターネットで予約したホテル名と町の名前を書いたメモをタクシー運転手に渡しました。自信ありげにハンドルを握った彼はずいぶん嬉しそうでした。

ところが、ハイウェイを東方へ東方へと走り出した車はどこまで行っても一般道へ降りようとしません。もうかれこれ1時間近く走ろうとしている。私は気がかりになって運転手に確認しました。



運転手は：

「まだまだ、ずっと先だよ。だってメキシコ湾に近い町なんだから」

「エッ まさかメキシコ湾まで!？」

あわてて頭に描いた地図でも、空港から 200 ㎞以上あります。

「とんでもない！そりゃ何かの間違いだ！地名違いだ！」

私は大声で叫びました。すると運転手は私が日本から持参した携帯電話を貸してくれ、と頼むと何やらわかりにくい英語でどこかと交信を始めたのです。そして通話が終わるとガックリした表情で私に向かって言ったのです。

「どうも町名を間違えたようだ。あんたの行きたいホテルは空港から 20 ㎞弱のヒューストンの郊外にある」

「なんということだ！」

車は再び来た道を 3 分の 2 ほど戻ったところで右折、しばらく走ってようやく目的のホテルに着いたのでした。この間、メーターは 220 ドルに上がっていました。

「これはあくまであなたの勘違いに原因がある。こちらはちゃんとメモまで渡しているし……。そんなメーター通りの料金を払えるはずがない！！」

何か言いたげな運転手に、本来だと 60 ドルほどで済んだであろう料金に、運転手本人が間違っただけとはいえその労に謝す意味も込めて私は 100 ドル紙幣を渡しました。本来は、60 ドルにチップを 10 ドルでもいいと思ったのですが、アメリカに着いたばかりで小額紙幣の手持ちがなく、やむを得ず払ったものだったのです。

予想外のところで予想外の出費！

一人旅のアドベンチャーではとんでもない誤解も起こる。それが結果的に楽しいこともあるのですが、やはり安全でお金がかからないに越したことはありません。

(3) 「ニューアーク」と「ニューヨーク」と間違えた！

昨日の続きです。パナマからの帰路の際にはニューヨークに住むお世話になった友人を訪ねる予定がありました。

日本でインターネットで最安値のフライトを探していたところ、パナマ——ニューアーク——成田、という格安便が見つかりました。“これは見つけもの”と切符を購入。帰途、パナマ空港で出発の手続きをしていたときも、「ニューアーク行き」との掲示があったのに、「きっとニューヨークの間違いだらう」と余り気にも留めずに機に乗り込みました。

ところが、搭乗機がパナマからニューヨーク近く（の筈）になってのアナウンスを聞いて驚愕したのです。

「機はまもなくニュージャージー州のニューアーク飛行場に着陸します」



「エッ ニュージャージー州？ニューヨークのケネディ空港はニューヨーク州ではなかったのか？」

「さて困った。今日の夕方 5 時には S G I のニューヨーク文化会館で大事な人に会う約束をしている。どうしよう！」

土壇場でわかったことは、それまで自分がニューアークをニューヨークと思い込んでいた誤解からだったのです。

インターネットで入ってきた E チケットをプリントアウトしたときも、「きっと、『ヨ』と『ア』のうっかりミスではないかな」なんて思っていたのです。（甘い！甘い！）

それにしても、ニュージャージー州がニューヨーク州の隣りで、ニューアーク空港もニューヨーク市から遠くないところにあつたことが助かりました。機を降りると空港職員に、ニューヨークに着く一番早い方法を聞きました。

「定期バスもあるけど、荷物もあるようだからタクシーだね。そんなに高いことはない。70 ドルくらいでいくかなあ・・・」とのこと。

なるほど、頑丈なアメリカ製大型車のタクシーに乗ると、ニューヨークの中心街（タイムスクエア）までピタリ言われた通りの料金でした。

結果オーライではあつたものの、それにしても、自分のうっかりミスでの一字読み違いが、とんだ災難を引き起こす直前だったのに心からの安堵の思いを抱いたものでした。

述べてきた失敗談やコワーい経験はその後の取材旅行にずいぶんと役に立っています。やむを得ない“授業料”でもあるのですね？

(4) 厳しい入国審査と反革命分子への警戒

これまでの3回はタクシーに関する体験でしたが、世界には政治や思想的な面でも平和な日本では考えられないような場面に直面することもあります。特に私が現役時代に特派員として赴任していた当時の中南米では、そうした場面がまま起こったのです。

時代は少々さかのぼりますが、1970年、80年代の中南米は、いくつかの国が独裁政権だったり、内戦が続いていたりしました。中米のニカラグアもその一つでした。

長期の独裁政権だったソモサ政権からサンディニスタ政権に移り変わった直後ころのことです。

まず、入国ビザの取得に際しては顔写真が2枚必要でした。申請書には本人の学歴、職歴、家族構成のほか、宗教、両親についてのデータなど、それはそれは詳しい内容についての記述が要請されました。



空港の入国審査では、何の目的で来て、どこに泊まり、いつ帰国するかといった質問が鋭くなされました。しかも、兵士風の審査官のいる受付窓口は、カーキ色のカーテンで覆われ、こちらからは中が見えないようになっています。それだけでも、秘密主義と反革命分子への警戒ぶりが伝わってきます。

出国に際しても、ふつう空港ではありえない、単なる荷物の大型トランクの中身のチェックさえあったのです。

私は、政治批判につながるような話は一切避けました。“カベに耳あり”。いつ、どこでそれが諜報機関に通じ、深夜にホテルのドアをたたかれるかわからない、と思ったからです。でも、ニカラグアのSGIメンバーとの個人的な懇談などではそうもいかない面もあったのです。

(5) 志願兵を志し悩む15歳のM君の話

ある会合が終わった後、メンバーでもある婦人のJさんが、子供のM君の指導してもらいたい、と懇願してきました。15歳になったM君は、政府軍の志願兵として家を出たいという。

反政府サイドにあったJさんの夫は、革命前にアメリカに渡ったまま、政治的理由で帰国できなくなっていました。革命が、政治が、夫婦の間を完全に切り裂いてしまったのです。

再婚した母の夫(継父)と家庭になじめなかったM君は、そこで家を出ることにしています。それに、男の級友の大部分はすでに“志願”して前線に行ってしまうている。このまま教室に残っていることは“臆病者”、“卑怯者”のそしりをまぬかれない。だから自分も志願したい、というものでした。

国民(男)の全員徴兵は18歳という国の法律と内戦の状況、悩む若者の心を押し量って、私は次のように激励しました。

「最後の結論は君自身が出すこととして、私は仏法者という立場から話しておきたい。まず、継父との関係については、難しい面もあると思うが、母の立場も考慮してあげて、とにかく一家が仲良く生活できるように、自分としても努力してみようか」

「次に、政府軍に志願する件については、できることなら控えた方がよいと思う。15歳だったらまだ“徴兵”の年齢とはなっていない。前線に出れば、当然、人(同じニカラグア人)を



殺さなければならない場面にも遭遇しよう。どんな状況下にあろうとも“人を殺す”ということは、仏法の見れば、自身の生命に消えることのない“因”を刻むことになる。したがって、できるのなら避けた方がよい」

「同級生から“臆病者”、“卑怯者”と言われたくない気持ちもわからないではないが、“自分は人を殺したくないから行かないんだ”と言い切っていく者こそ、また“真の勇者”とも言えるのではないか」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

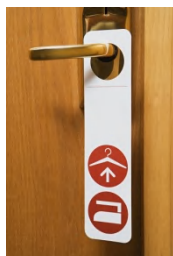
(6) ホテルのドアを叩かれないかと危惧しながら

——その夜、現地のリーダーにこの件を報告すると、彼はやや心配そうな顔をしてこう言ったのです。

「彼（M君）が、学校で担任の先生や校長に言わなければいいんだけど……。これからは政治の方針にかかわるようなことは、一切触れないでください。ホテルでも気をつけてもらわないと……」

つい3カ月前、政府批判をしたキリスト教の宣教師3人が国外退去を命じられたばかりといます。彼の言わんとすることをもう少しまとめてみれば——。

もしM君が学校で、志願しない理由を「今マナグアを訪れている日本人からそのように諭されたので」とでも先生に報告したとすれば、私は政府への叛乱分子をそそのかしている、



ともとられかねず、「ちょっと軍本部まで」と、夜中にホテルのドアを叩かれることもなきにしもあらず、ということなのです。

私は政治批判や、そそのかしをした訳ではまったくなかったのですが、それでもこう言われてみれば、仏法者として“当然”と思って発言したことさえも、自らの身の危険につながっていたことを知って、体中から冷や汗の出る思いがしたものでした。自分がかまるだけでなく、身柄の引き取りに大使館などが絡んできたとき、所属する団体名がマスコミにも出て、大変な迷惑をかけることになるのも恐れたのです。

(7) 無事に出国できて胸をなでおろす

心配しながらホテルでの一夜を過ごしたのですが、幸いにも、翌朝までドア叩きはありませんでした。

ホッと胸をなでおろしながら私は帰国のための空港に向かいました。でも空港で“待ち伏せ”に会うかもしれません。空港では再び出国の煩雑な手続きを、胸をドキドキさせながら済ませました。

すべてが終わると、私はギラギラ  と太陽の照りつける熱暑のサンディーノ国際空港の地面を50メートルほど歩いて、TACA(エルサルバドル国営航空)便に乗り込みました。最後の乗客が機内に入ると、搭乗口のドアが閉まり、機はジェット

音を高鳴らせて地上を滑り出しました。

「ケ スエルテ！（なんて幸運な！）」。

私は、座席のシートベルトを締めると、思わず遠くに走りゆく空港の建物に目をやったのです。

——思想や発言の自由が当たり前となっている、恵まれきた平和の中にどっぷりと浸かっている人には、ちょっと想像もできないこのような場面も世界にはあるのです。

（8）軒下の借用に思わぬ危険

中南米（いやアメリカなど“銃の自由な国”もそうですね）でもう一つ注意しなくてはならないものに“正当防衛”があります。

駐在していたパナマでの話です。あるとき、首都パナマ市から車で4時間ほどの地方都市チトレを訪れました。その帰り道、例の熱帯のスクールに見舞われ前方が見えないほどになった。悪いことに、やや走り疲れてきた車のマフラーが外れかけ地面を引きずりそうになってきたのです。

“これはどこかで雨宿りをして、針金でマフラーを車台に縛りつけ、取り敢えずの手当てをしなければいけない”とその場所を探しながら運転をしていました。民家は数百メートルごとにポツンポツンと点在しているのみ。夕方の6時過ぎ。降りしきる雨もあって周囲はもう真っ暗です。

と、少し先に民家の灯りが見えてメートルほど入ったところでは見“あそこなら取り急ぎの応急修理はを緩めハンドルを右に切るとそのまま



きました。ハイウェイから私道を50た限りでは家の軒下が大きそうです。できるかもしれない”。私はスピード私道に入ろうとしました。玄関まで行

って事情を話し軒下借用の許可を得ようと思ったのです。

と、運転席の隣に座っていたパナマの友人が、あわてて血相を変えるようにして怒鳴ったのです。

「ダメ、ダメ！入って行っちゃダメ！」「車ごと行ったら銃で撃たれるかもしれないよ。まずオレが行って話してくるから・・・」

そう言うと降りしきる雨の中、彼はホールドアップしたように両手を挙げたまま家の玄関まで行ったのです。

（9）「撃たれる前に」正当防衛！

家から出てきた主人となにやら話していた友人は、ニコニコ顔ですぐに戻ってきました。「OK、軒下を使ってもいいですよ！」

私はゆっくりと車を運転して家に近づくと、主人から指示された場所に車を止め、臨時の手当てを始めたのです。

「もっと太い針金もありますよ」

私の作業を見ながら主人は気を遣っていろいろな配慮までしてくれました。

“雨に濡れないところで作業できてよかった。このまま走ったら車はパナマ市までもたず、マフラーが途中から地面を引きずり、とても危険な状態になっただろうから”——私は主人に心からのお礼を言うと再びハンドルを握ったのでした。

車が動き出すと友人が追加の解説を始めました。

「もしあなたが車ごと入っていったとしたら、向こうは『アッ 強盗が入ってくる。ヤバイ！襲われる前に撃ち殺してしまわねば・・・』と我々を狙ってきたかもしれません。当然ですが、見知らぬ人が私道に入ったら家主は不法侵入ということで正当防衛できるんですよ。この近辺の民家では銃を保有している家も多い。危ういところだった。犠牲にならなくてよかったですよね」



「なるほど、そういうことだったのだ！」

日本では、警官が泥棒を撃っても、それが正当防衛かどうか議論される。銃に対する考えが日本とは大きく異なった国にいることを改めて認識したのです。

そういえば、十数年前にハローインでアメリカ人の家庭を訪れた日本から留学中の高校生が、その家主に銃で撃たれる、といった悲しい事件がありました。海外を訪れる際には、その国の治安事情のほかやさしい法的知識も知っておくことも必要なのですね。

(10) 写真撮影にことよせて・・・

ここからはヨーロッパでの話です。

中南米と比べてヨーロッパの国々の治安は、一般的にはるかによいと思います。でも、どこにでも悪い人はいるもの。また一部の危険地域もあるものです。

定年後にスペインに留学中に古都トレドを訪れたときのことでした。マドリードのアーチャ駅から約1時間半、近郊線で南に行くとトレドに着きます。トレド駅は実に芸術的な作りで、構内の随所に美しいステンドグラスがはめ込まれ、壁はイスラムのモザイク模様。天井も高くなっています。

スペインの代表的観光地として知られるこのトレドは、カスティーリャ・ラ・マンチャの中心地。キリスト教、イスラム教、ユダヤ教の三つの文化が混在、1500年以上の古い歴史があります。奥州の伊達政宗に派遣された支倉常長の一行も、このトレドを通してマドリードに入城したのです。



トレド駅から街の中心に向かって歩いていきました。目指す旧都は丘の上、タホ川を渡った側にあります。妻と一緒にその長い橋を渡っていると、向こうから1人の青年がやってきました。カメラを構え、自分が橋上のどこに立ったら丘の上の旧都をバックにいい写真が撮れるか、場所を探しているようでした。そして、こちらが行き過ぎようとする、とっさに声をかけてきました。

「すみません、シャッターを押してくれませんか？」

(11) 「偽警察官」を見破った！

スペイン有数の観光地です。誰でも、どこでも写真を撮っています。またそれに協力するのは当たり前、お互いさまでしょう。

「OK」。私はころよく引き受けました。そして彼の指示に従って、カメラを向けました。だが、バックがぴたりと決まっていません。そこで私は「もう少し左に移動した方がバックがきれいに入りますよ」と声をかけました。彼は、少しの動きを見せたのですが「いい、いい、そのままいいから」と、特に気にする様子もありませんでした。

撮影したカメラを彼に戻し、再び目的地に向かおうとしました。

と、突然、私たちの前に2人の男が現れて立ちふさがったのです。そして、ポケットから身分証明書のようなものをおもむろに取り出すと、少々の威厳を込めて言いました。

「警察のものだけど、身分証明書、パスポートを見せてください」

スペイン警察の制服は着ていません。もしかしたら、私服の警官かもしれない。でもその瞬間、なぜか私にひらめいたのです。

「きっと、これは偽警官だ！」

妻もそれを察したらしく、「行きましょう、行きましょう。かまわずどんどん行きましょう」と、私の手を引っ張りました。私たちは駆け足気味でその場を50メートルほど離れたところで、追いかけているかどうか気になり、後ろを振り向きしました。すると、3人はその場でまだたずんでいたのです。

間違いなく、これは強盗未遂でした。しかも、警察官に名を借りた！今思えば、あの写真のバックは何でもいいわけであり、まして、カメラにはフィルムさえ入っていなかったでしょう。

聞くとところによれば、日本人のパスポートは高額な値段で取引されているといます。そうした情報を事前に聞いていたので、外に出るときは、いつもパスポートのコピーだけを持ち歩くようにしていました。だから仮にやられても、その面の被害はなかったのですが、持ち金すべてを掠め取られたであろうことは間違いありません。運悪ければ、危害まで加えられて……。

大好きなスペインのイメージを崩さないために、こんな話には触れたくありませんが、どこの国でも、一部だが悪い人間がいるもので、特に観光地では気をつけなくてははいけない、ということなのです。

(12) マドリードで巧妙なすりの手口

6年前、『ドン・キホーテ』出版400周年の取材で、スペイン各地にある物語の舞台を回っているときのことでした。

マドリードからラ・マンチャに行く列車の中で同行のIカメラマンが叫びました。

「アレ？ 清水さん、背中リュックが開いたままになってるけど……」



「エッ！ そんなはずないよ。だってソフィア王妃美術館（ピカソの超大作ゲルニカがあります）を出たところで、資料をリュックに入れキチンと紐を結んだんだから・・・」

それでも気になり、背中のリュックを下ろし、車内のいすに乗せて調べかけた私は一瞬、青くなったのです。

「アッ やられている！」

リュックの紐は完全にゆるみ口が開き上部に置いたものがなくなっています。めがねのケース。先のソフィア王妃美術館の資料。携帯のお守りのケース。筆記用具を入れた袋。それにクレジットカードの入った財布——現金は 2 箇所に分けて所持していたので盗られたのは持参金のほぼ半額で助かったのですが、「クレジットカードは悪用されないようにすぐに手を打たなければいけない！」

「すぐに！」といっても列車の中。やむを得ず、目的駅に着いたらそのまま現地の警察署に直行しようと腹を決めたのです。



一番大切なパスポートは別ポケットに入れてあったので盗られなかったのは不幸中の幸いでした。それにしても、いつ、どこでやられたのか！？

I カメラマンと行程をたどっていくと、意外な場所ではほんの数秒間に被害に遭ったことがわかってきたのです。

(13) 圧倒的に狙われる日本人旅行者

ソフィア王妃美術館を出てアトーチャ駅までの、歩いて 5 分にも満たない距離の中間に、長さ 10 メートルほどの横断歩道が二つあり、美術館から出た人や他の歩行者も混ざって結構な人ごみでした。信号が赤になれば当然ストップです。そして青に変わるまでの数十秒間に“犯罪”は起こったのです

I 氏は私から離れて歩いていだし、自分は後ろに目がなかったわけだから、当然“現場”は見えていません。でもスペイン人の友人から聞いたスリの手口を再現するとこんな形になるようです。

——たぶん“犯人”は 3 人以上。信号待ちで立っている私の後ろに 2 人が近寄り、1 人が新聞を広げ読む感じで私のリュックを覆う。もう 1 人が新聞の下でサッとリュックを開け中身を取り出す。もう 1 人は数メートル近くでその作業を見張っていて、万が一失敗したときには 3 方面に分かれて逃げる・・・といったものです。

訪ねた警察署では、こうした被害に遭った旅行者が多いのか手馴れたもので、必要書類への書き込みとか、クレジットカードのキャンセル方法とかを向こうから教えてくれたのでした。

“海外旅行のプロ”と自認、機に応じて他の旅行者にも注意やアドバイスをしている自分がやられてしまった！相手が上手だったといえばそれまでですが、それにしても注意に注意をするに越したことはない、と改めて認識した次第です。



とはいっても、スペインの一般的な都市や地方での治安はおおむね良好で問題ありません。ただし、首都マドリードとバルセロナに限っては、圧倒的に日本人旅行者が狙われていることをしっかりとお知らせしておきます。